

富岡小学校校歌

作詞 吉見教英

【明治四十四年】

- 一 彼の山陽が 詩いたる 雲か山かの 大洋は
ばんりびょうぼう とうとう よ かせ しじはな
萬里渺茫 堂々と 寄せては返す 四時の花
- 二 天領以来 芥州に 歴史も古し 臥龍岡
せいかい いっしょうち しょうらいふだん かく おと
ここ西海の 一勝地 松籟不斷の 樂の音
- 三 連衣を抱く 巴崎 隔てて仰ぐ 温泉の山
ちちわ なた かげ しろ なみ ゆき
千々岩の灘に影ながし 白きは波か はた雪か
- 四 吹く潮風に 塵寰の 穢れも波の別天地
だつぞくきぜん そうくう がくしゃそばだ うみ なか
脱俗巍然 蒼空に 学舎峙つ 海の中
- 五 聖意畏み 撫子の 花とりどりに 咲き出る
むそう らくど ようよう きぼう いくせいそう
無雙の楽土 洋々の 希望をたたえて 幾星霜
- 六 規律禮儀を 重んじて 勤勉努力 弛みなし
こうりゅうひとたび くも え せいうん へ たつ
蛟龍一度 雲を得ば 星雲の辺に達すなり
- 七 千足の國に 生を享け など無為にして 止むべきぞ
くもい しの うんぜん のぼ つい のぼ
雲居を凌ぐ 雲仙も 登らば終に 登るべし
- 八 水天髻 一碧の 天草灘の 荒波も
ふとう ところ かつ ひがん つ
不撓の心 固ければ などが彼岸に 着かざらん

北海道教育大学非常勤講師 野口芳宏氏 訳 【平成十四年】

- 一 かの大儒学者の頼山陽も感じ入って歌に詠んだ、この見はるかす大海原は、見渡す限りの果てしない広さで、いつも波を湛（た）えて四季を美しく彩っている。
- 二 天領と定められたここ天草の地には、歴史も古い臥龍山がある。ここは西海地方きっての景勝の地であり松風の美しい音が響いて絶えることがない。
- 八 はるかに見渡せば海原と天とがその果てに合して混然とした青一色に見える。よしや、この天草灘の荒波が前途に立ちほだかろうとも、くじけぬ闘志を抱いて渡ろうとするならば、目指す彼岸に着けぬことなどあろうか、いや必ず着けるに違いないぞ一。

